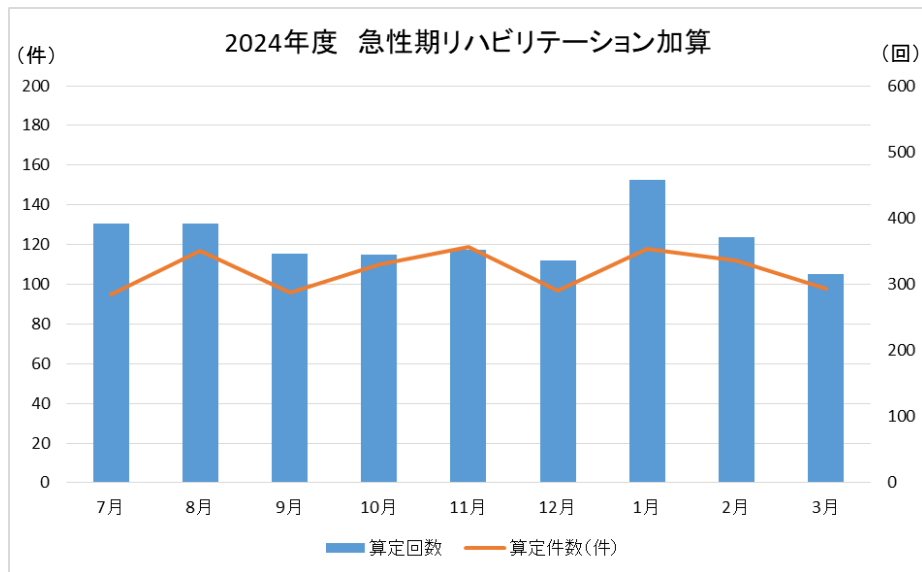
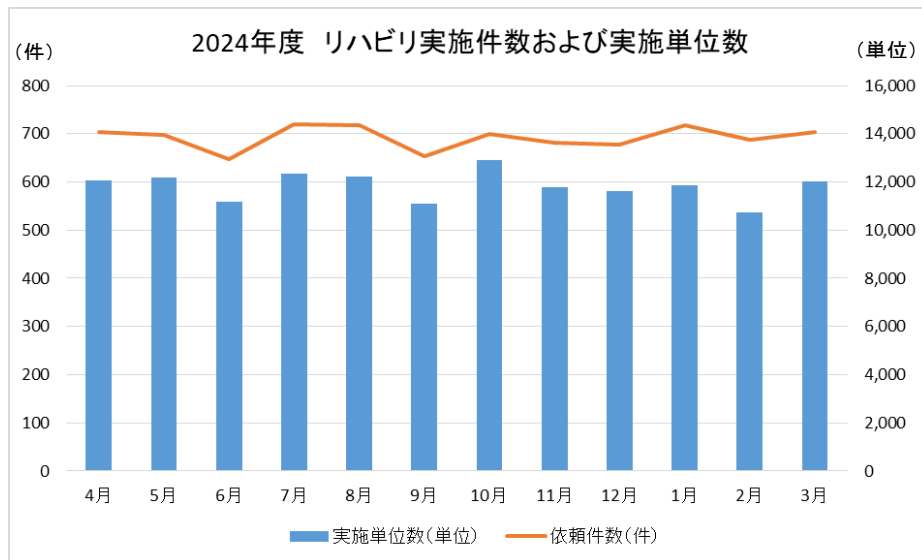


## リハビリテーション科

2024年度のリハビリテーション科は、常勤医師1名、理学療法士（PT）28名、作業療法士（OT）11名、言語聴覚士（ST）8名、マッサージ師1名、事務員2名体制でリハビリテーションに従事した。

2024年度は新型コロナウイルス感染症対策も大幅に緩和されたが、散発的に流行する時期においては、特別な感染症対策が必要であり、診療時間の調整や担当者変更など現場での対応が必要であった。各診療科から3療法へのリハビリ依頼件数；648-720件/月、全体での取得単位数；10,726～12,921単位/月と変動が見られた。リハビリ依頼件数は入院患者数の変動に左右される傾向があり、取得単位数の変動を少なくするための取り組みを各療法で行い、昨年度よりは単位取得数の変動は抑えられた。2024年度の診療報酬改定により新たに算定が可能となった急性期リハビリテーション加算は、算定件数；95-118件/月、算定回数；315-458回/月であり、引き続き適切に算定していく取り組みの継続が必要である。



## <理学療法部門>

### 【中枢チーム】

中枢チームは PT6-7 名にて主に脳神経外科、脳神経内科の患者診療にあたった。主として脳卒中、脳腫瘍、頭部外傷、脊椎疾患の保存療法や手術療法に対する術前後のリハビリテーションを実施した。また、パーキンソン病・パーキンソン症候群、その他神経難病などに対するリハビリテーションや、本態性振戦に対する FUS の治療前後の評価を実施した。2024 年度は気管切開後に人工呼吸器を装着した患者のリハビリテーションを実施する機会が多く、リハビリテーション科医師や OT・ST と協同しながらリハビリテーションを行った。脳外科病棟・脳神経内科病棟に行っているリハビリカンファレンスでは、病棟スタッフとリハスタッフが患者様の目標を共有し、退院後の生活を見据えて、運動面だけでなく日常生活や高次脳機能障害に対する多職種介入を実施した。教育・研鑽の機会として、週 1 回ケースカンファレンスや実技練習を実施している。また症例・研究報告などの学会発表にも取り組み、院外のスタッフとの意見交換も行った。

### 【内部チーム】

PT：9-11 名で診療にあたった。内科系では呼吸器内科・循環器内科・消化器内科・腎臓内科・血液内科を中心に、その他幅広い科から廃用症候群の改善や予防を主な目的とした理学療法を実施した。外科系では、消化器外科・呼吸器外科・心臓血管外科を中心に術前介入、ICU からの術後早期介入を実施し、術後合併症予防を主な目的とした理学療法を実施した。ICU 内での離床開始日数は経時的に短縮している。難渋症例に関しては他職種とのカンファレンスやチーム内でのケースカンファレンスを定期的に開催し ADL 低下予防に努めた。訪問チームと連携を測り、定期的に訪問リハビリテーション対象患者を抽出し、退院後の ADL・生活を維持できるよう連携した。NICU、GCU の新生児領域では、低出生体重児、早産児を対象とし、呼吸リハビリテーション、発達評価、哺乳練習を実施した。また、週 1 回他職種カンファレンスに参加し、児と家族のサポートを円滑に行える様に情報共有、介入の提案を行った。また、一般病棟では乳幼児から中高生を対象とし、呼吸器疾患、代謝疾患、整形疾患、中枢疾患、発達障害にて入院した児のリハビリテーションを実施した。入院早期からリハビリテーション介入を行うことによって、廃用の予防や就学支援を円滑に実施するように取り組んだ。発症・再発予防を目的とした多職種での患者教育に携わっており、主に心不全教室や腎臓病教室（キドニーデー）で運動療法について指導・教育を行った。最新の知見ならびに科学的な根拠に基づいた治療を提供できるよう各種研修会への参加や学会発表・論文報告も積極的に行った。また、年間を通して実習生を受け入れ後進の育成にも取り組んでいる。

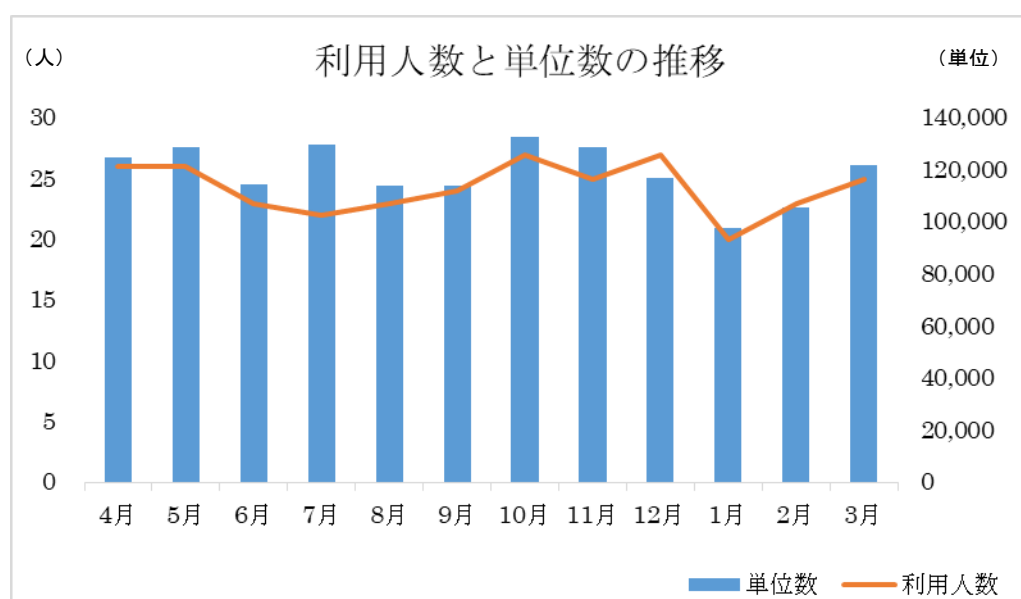
### 【整形チーム】

PT5-6名・マッサージ師1名にて診療にあたった。整形外科からは脊椎外科（頸椎、胸椎、腰椎）、関節外科（TKA、UKA、THA）、靱帯損傷（ACLや半月板の損傷・断裂）、各種外傷（脊椎、上下肢の骨折など）、腱板損傷・断裂後の術後症例を主な対象とし、医師と密に連携を図りながら術前後の評価、介入をおこなった。また病棟スタッフとは早期にADLの回復が得られるように1回/週リハビリカンファレンスを実施し転倒リスクやADLの状況を共有・転帰の相談をおこなった。その他の診療科として、リウマ

チ膠原病内科（主に膠原病）、糖尿病内科（運動療法）、形成外科（切断など）、耳鼻科（頭頸部癌）の症例に対して理学療法の介入をおこなった。教育面としては1回/週のケースカンファレンスをおこない、知識面・技術面ともに研鑽にあたった。また、整形外科と共同でカンファレンス兼勉強会を1～2回/月に開催し、多角的な視点から症例に対して評価・介入方法の検討をおこなった。標準的な評価がおこなえるよう、ガイドライン等を参考に股関節・膝関節疾患に対するチャートを作成し運用を開始した。2025年度より365日体制のリハビリ開始に向け、情報収集をおこない当科での準備を進め、整形外科医・病棟看護師へ周知をおこなった。

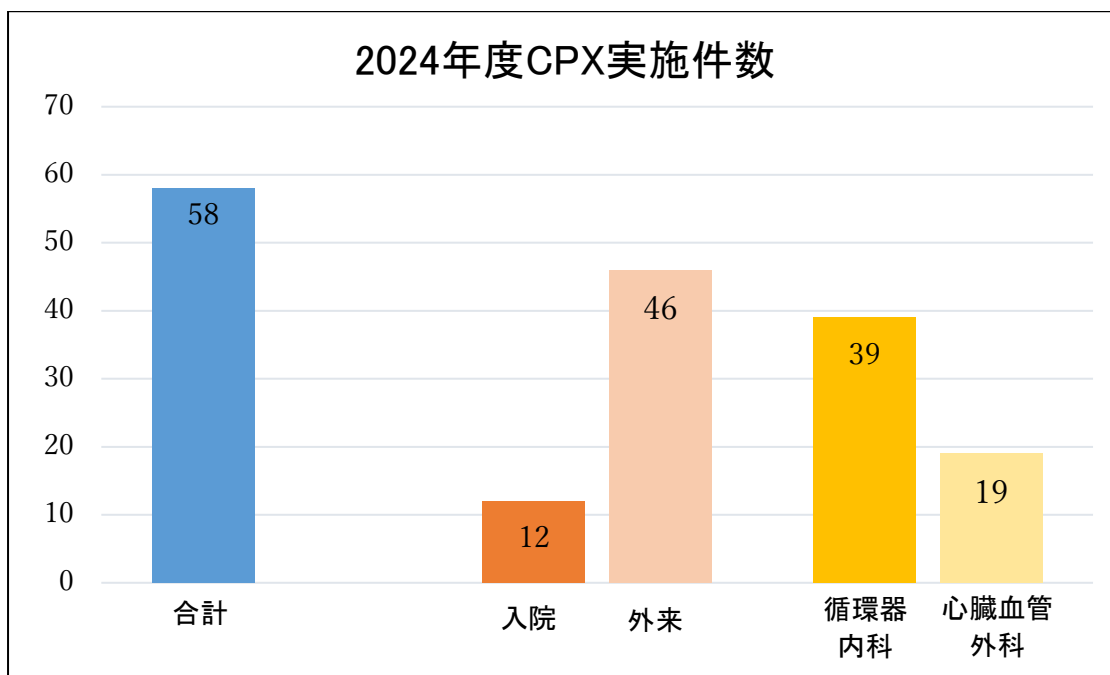
### 【訪問チーム】

訪問チームはPT3名、ST1名（院内兼務2名）で活動している。前年度よりスタッフが減少し、1月あたりの平均利用者数は24名、平均単位数は119,355単位であった（図1参照）。疾患内訳は呼吸器28%、循環器28%、がん関連5%、整形外科17%、その他22%、退院後の訪問リハ開始までは平均3.0日であった。北区・都島区を中心に、当院より約5km範囲を対象地域とし、退院後の早期の介入により、自宅生活を安心して過ごせるよう実施した。当院訪問リハ終了後には地域の周辺事業所と連携を積極的に行い、利用者のニーズに合わせた日常生活動作能力の維持・改善を目的に地域の各関連職種へ引き継ぎを実施した。令和6年度介護報酬改定に伴う退院時共同指導加算の取得とそれを期に診療報酬である退院前訪問指導料の取得の流れを整備し、退院直後の自宅生活を安心できるよう病院内からの関わりをより一層強化した。教育活動においては、これまでの院内との兼務から訪問専属のローテーターとして、訪問リハビリ同行機会の増加や院内からの訪問対象者介入により、病院から在宅の一連の過程について経験できるよう努めた。さらにローテーターを通して病院内リハビリスタッフへ在宅の現状をフィードバックする機会を設けた。地域活動として、北区地域包括支援センターなどへ介護予防を目的とした自立支援会議や介護予防活動の講師活動にも積極的に参加した。



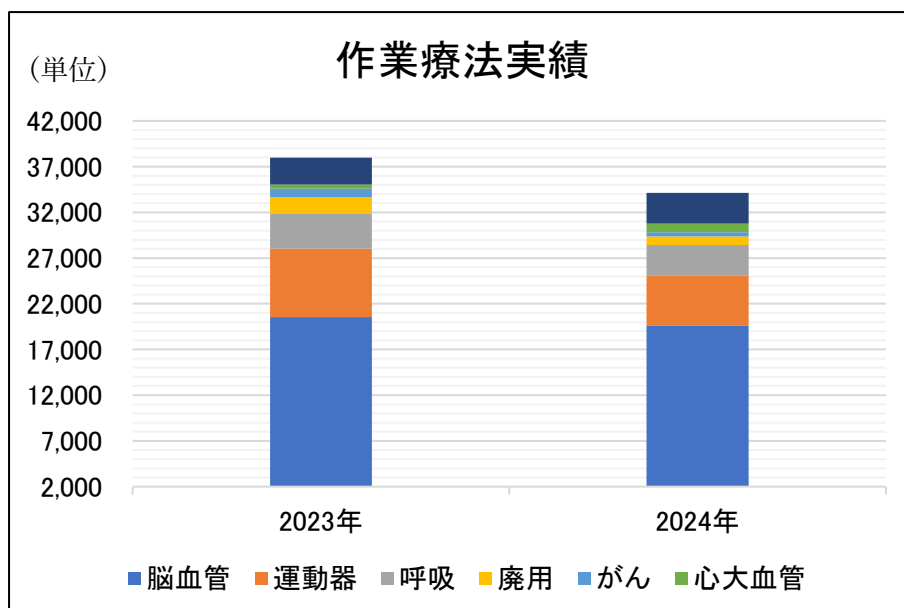
### <心肺運動負荷試験>

心肺運動負荷試験（CPX）は理学療法士 2 名、医師 1 名で施行しており、主な対象は入院ならびに外来の循環器疾患患者である。急性冠症候群、心不全、心臓血管外科術前・術後患者に対して、運動耐容能の評価、運動処方や日常生活指導、息切れの鑑別、心筋虚血や心不全の重症度評価、運動療法の効果判定を目的として施行している。循環器疾患患者の高齢化が進む本邦においても、通年、実施件数は維持できしており、高齢循環器疾患患者様の生活・運動指導としても活用できている。CPX 施行には医師立ち会いが必要となるため、循環器内科医師と協同しながら、実施件数の維持に努めていく必要がある。



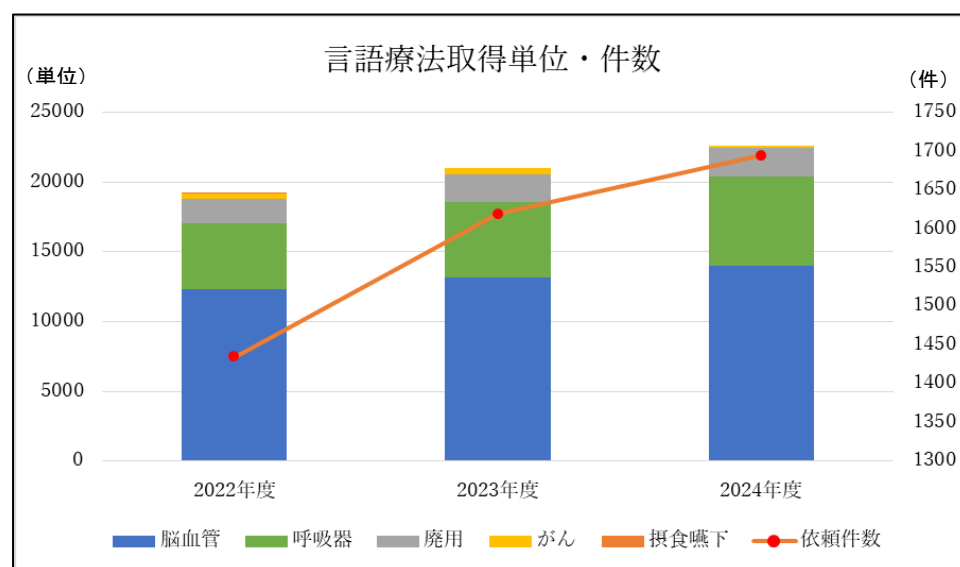
### 【作業療法部門】

作業療法は、脳神経外科・脳神経内科・整形外科・呼吸器内科を中心とした診療科の依頼を受けて、昨年度より 3 名少ない 9 名で診療業務を行った。身の回りの動作だけでなく、家事・復職を含めた社会生活への復帰、また趣味的活動も踏まえて“その人らしい生活”を目指した介入した。身体機能や高次脳機能の回復と動作能力の向上を促すと同時に、病棟内での実際の食事場面での環境調整や入浴動作において酸素飽和度・呼吸の変化を確認しその場で直接的な動作指導を行う役割を担った。今年度は訪問部門を休止し院内の診療業務を優先して、急性期での作業療法士の役割について教育を強化した。作業療法士の減少に伴い総患者数や単位数は減少しているが、作業療法士 1 人当たりの平均単位数は増加しており、部門内教育が患者や診療科の要望に応えるという認識の向上が単位数の増加にも繋がっていると考えている。



#### 【言語療法部門】

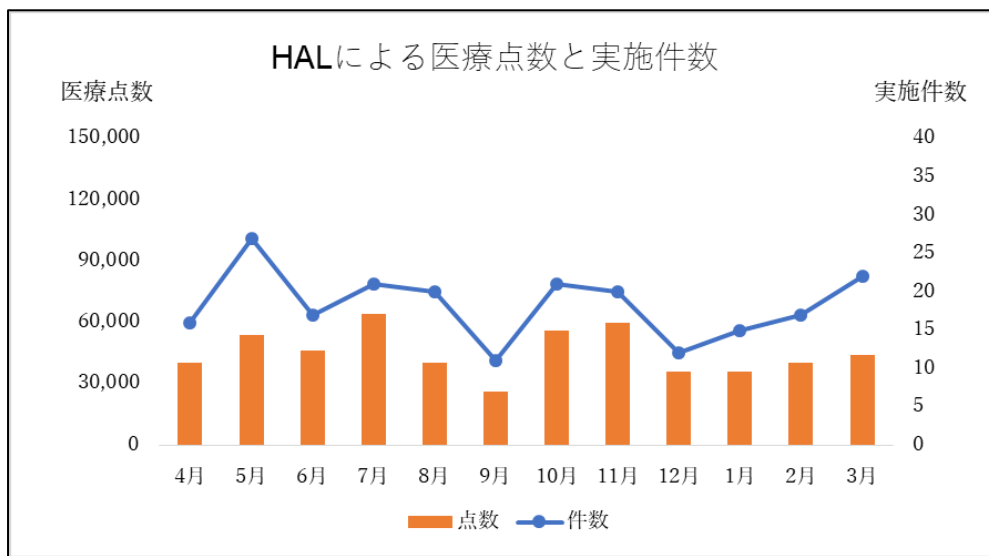
言語療法では ST 7 名が在籍。脳神経外科、脳神経内科を中心に高次脳機能障害、失語症、構音障害、音声障害などのコミュニケーション障害や摂食・嚥下障害に対してのリハビリテーションを実施している。呼吸器・循環器・消化器を中心に幅広い科からのオーダーに対応している。2024 年度は年間で 1694 件の依頼数を受けており、脳血管疾患・呼吸器疾患の依頼が多く、呼吸器の患者の必要性が高くなっている。嚥下造影検査、嚥下内視鏡検査（耳鼻咽喉科での実施）での他覚的評価を行い、安全に嚥下訓練を進められる環境を整えている。成人だけでなく小児分野でも活動しており哺乳・離乳食の段階での嚥下評価、発達状況に応じてリハビリテーションを実施している。訪問リハビリ分野では、院内と訪問業務の兼任で活動しており、入院から地域につなげた介入を行い、再入院のリスク低減に努めている。臨床業務に加えてNST、口腔嚥下リハビリテーションチームにも所属し多職種との活動や病棟に対して摂食嚥下障害の勉強会開催にも取り組んでいる。



### 【ロボットスーツ HAL 部門】

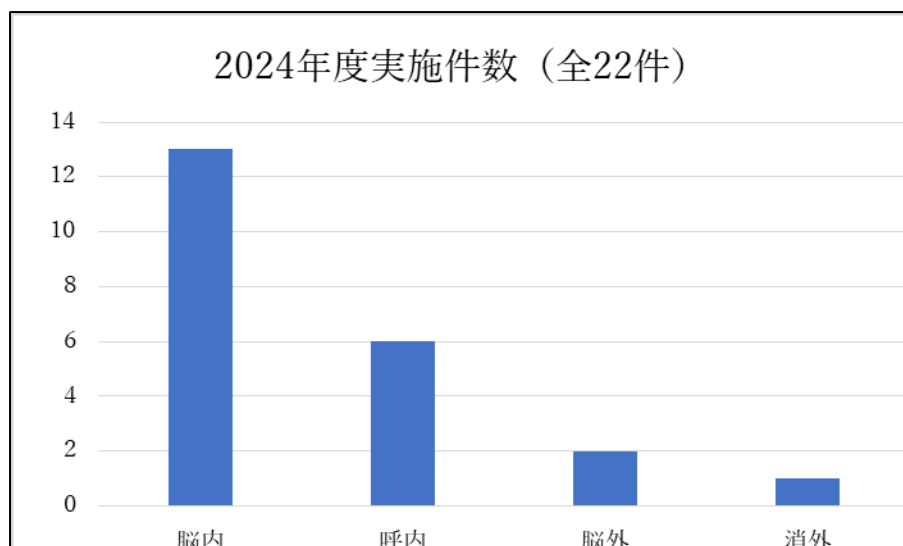
HAL に関するチーム体制は医師 1 名、PT8 名で、外来リハビリテーションとして実施している。リハ科ホームページには、HAL を実施している動画や、実際に HAL によるリハビリテーションを実施された患者様の感想などを掲載している。ホームページをみた患者様からの問い合わせの割合が増えている。近畿圏内において、入院で HAL を実施している施設や自費診療として HAL によるリハビリを実施している施設はあるが、保険診療下・外来リハビリのみを実施しているのは当院だけである。

HAL の診療実績としては、対象者人数：18 名（内新規 9 名）であり、昨年度より新規患者が 5 名増加した。年齢的にまだ就労期にある患者様は、外来での HAL 実施を希望される方が多く、当院での実施方法にマッチしていると考えられる。一人当たり、前後評価含め 1 クール 11 回、平均 18.1 回/月実施した。



### 【嚥下造影検査】

“食べる”ことは生活の質の向上にもつながり、患者様・ご家族の生きる希望となっている例は臨床で多々遭遇する。嚥下造影検査（VF）は患者様の現状の嚥下機能の把握・誤嚥の有無・食事形態の決定・代償嚥下の有効性を確認するために行う検査である。放射線科、栄養部の協力の下、毎週金曜日 9:00 から 3 枠でリハビリ医師 1 名、担当言語聴覚士 (ST) 1 名が実施している。実施件数は年々増加傾向で 2024 年は全 22 件実施し、主に脳神経内科、呼吸器内科からの依頼が多かった。検査結果は患者様・家族様に説明し主科への報告すること、経口摂取の開始、食事形態・環境の調整、誤嚥性肺炎の再燃予防、在宅復帰に向けて多職種と情報共有に還元をしている。



#### 【研究課題】

- 1 心不全患者の社会参加と予後ならびにフレイルとの関連の検討  
(鶴本一寿、上坂建太)
- 2 心臓外科術後の要介護度悪化に関わる因子の検討  
(上坂建太、鶴本一寿)
- 3 労作時低酸素血症を呈する慢性呼吸不全患者における在宅酸素療法の酸素投与量適正価  
(浦慎太郎、本田憲胤、大洞佳代子、北島尚昌、福井基成)
- 4 パーキンソン病患者の重症度と身体機能との関連  
(浦慎太郎)
- 5 リハビリテーション科におけるインシデント・アクシデント事例に関する観察研究  
(松岡森、本田憲胤、大洞佳代子)
- 6 高齢の慢性呼吸器疾患患者における新たなリハビリテーションプログラムの有効性に関する大規模多施設研究  
(松岡森、神津玲、花田匡利、他、当院含む 57 施設)
- 7 脳卒中患者の急性期リハビリテーションの進行や急性期病院退院時の機能的予後に影響を与える要因についての調査  
(辻本実奈美、浦慎太郎)
- 8 新生児における四肢・体幹の筋厚・脂肪厚の検討  
(本田憲胤、富謙伸、水本洋、阿水 利沙)

#### 【学会】

- 1 遠近奈緒、本田憲胤、大洞佳代子 ST 介入後にカニューレの早期抜去を目指した重症肺炎の一例  
第 25 回日本言語聴覚学会 2024/6/21-22(兵庫)
- 2 古井香穂、矢守麻奈 頸部伸展位が構音・摂食嚥下機能に及ぼす影響 第 25 回日本言語聴覚学会  
2024/6/21-22(兵庫)

- 3 峰村 幸宏、浦 慎太郎、遠近奈緒、本田憲胤、大洞佳代子 両側の急性硬膜下血腫により四肢麻痺を呈した症例-自己摂取獲得に向けて食事の先行期に着目して- 第 44 回近畿作業療法学会 2024/6/29-30(大阪)
- 4 鶴本一寿、上坂建太、徳元翔子、本田憲胤、大洞佳代子、中根英策、猪子森明 心不全患者の入院前の口腔機能低下は身体的フレイルと関連する 第 30 回日本心臓リハビリテーション学会学術集会 2024/7/13-14(兵庫)
- 5 徳元翔子、上坂健太、吉田都、鶴本一寿、本田憲胤、大洞佳代子、齊藤亘、福田弘毅、中根英策、猪子森明 乳癌術後化学療法中に心不全を発症し外来心臓リハビリテーションにより運動耐容能改善を認めた 1 症例 第 30 回日本心臓リハビリテーション学会学術集会 2024/7/13-14(兵庫)
- 6 渡辺大稀、浦慎太郎、本田憲胤 脊髄性運動失調による歩行障害に対して局所振動刺激を用いた脊髄動静脈血管奇形の一症例-ABAB デザインを用いたシングルケースデザイン- 第 36 回大阪府理学療法学術大会 2024/7/28(大阪)
- 7 川崎武人 富謙伸 浦慎太郎 本田憲胤 びまん性汎細気管支炎患者に対しコンディショニングが運動耐容能の向上に寄与した一症例 第 36 回大阪府理学療法学術大会 2024/7/28(大阪)
- 8 前田麻里、益尾洋児、富謙伸、本田憲胤 MechanicalInsufflator-Exsufflator が排痰・無気肺の改善に奏功した肥満性低換気症候群の 1 例 第 10 回日本呼吸理学療法学会 2024/9/7-8(新潟)
- 9 浦慎太郎、本田憲胤 24 時間 SpO2 モニターと身体活動量計を用いて、在宅酸素療法の流量適性を評価した症例 第 10 回日本呼吸理学療法学会 2024/9/7-8(新潟)
- 1 0 上坂建太、豊浦尊真、本田憲胤、大洞佳代子、中根英策、猪子森明 腎機能障害を呈した高齢心不全患者に対する運動療法の実践 第 43 回日本臨床運動療学会 2024/9/14(京都)
- 1 1 辻本実奈美、浦慎太郎、本田憲胤、大洞佳代子 自宅外退院となった心原性脳梗塞患者における急性期病院退院時の転帰による対象者特性の比較 第 22 回神経理学療法学会学術集会 2024/9/28-29(福岡)
- 1 2 富謙伸、本田憲胤 NICU 入室児における体格が横隔膜運動に与える影響の検討 第 10 回日本小児理学療法学術大会 2024/11/2-3(福島)
- 1 3 吉田都、富謙伸、本田憲胤 リスク管理を行った上での発達支援により動作再獲得に至ったミトコンドリア肝症の一症例 第 11 回小児理学療法学会学術大会 2024/11/2-3(福島)
- 1 4 浦慎太郎、本田憲胤 HOT 適正流量を SpO2 モニタリングと身体活動量計で評価した最重症 COPD 患者の一例 第 35 回呼吸ケア・リハビリテーション学会 2024/11/15-16(愛知)
- 1 5 嶋津鮎美、浦慎太郎、本田憲胤 縦隔気腫を合併した間質性肺炎合併抗 MDA5 抗体陽性皮膚筋炎の一症例 第 35 回呼吸ケア・リハビリテーション学会 2024/11/15-16(愛知)
- 1 6 本田憲胤 富謙伸 水本洋 阿水利沙 澤田優子 新生児の体重は上腕の筋厚・脂肪厚と関連がある 第 68 回日本新生児成育医学会・学術集会 2024/11/8-10(長野)
- 1 7 上坂建太 慢性心不全患者における要介護と予後との関連 第 8 回循環器理学療法学術大会 2024/11/23-24(宮城)
- 1 8 鶴本一寿、上坂建太、徳元翔子、村司憲三朗、本田憲胤、大洞佳代子、中根英策、猪子森明 高齢心不全患者における KCL で評価したフレイルと心不全再入院との関連 第 8 回循環器理学療法学術大会 2024/11/23-24(宮城)

- 1 9 松岡森、大洞佳代子、本田憲胤 急変時対応の見直しと取り組みの成果 第 19 回医療の質・安全学会学術集会 2024/11/29-30(神奈川)
- 2 0 伊村祐奈、浦慎太朗、河野風花、峰村幸宏、山内和江、本田憲胤 日常生活指導・セルフマネジメントを行い再入院が予防できた一症例 第 38 回大阪府作業療法学会 2024/12/1(大阪)
- 2 1 本田憲胤 リハビリテーション科スタッフが抱えるストレスの現状 第 7 回日本理学療法管理学会学術大会 2024/12/11(千葉)
- 2 2 伊藤誉人、浦慎太朗、亀山千尋、佐竹裕輝、本田憲胤、大洞佳代子 体幹アライメント異常を有する THA 術後患者に対して自覚的脚長差の改善を目指した症例 第 5 回中支部新人症例発表会 2025/1/26(Web)
- 2 3 三並穂奈美、浦慎太朗、辻本実奈美、河野風花、徳元翔子、大洞佳代子、本田憲胤 薬剤調整後、寝返り動作獲得を目指したパーキンソン病の一症例 第 5 回中支部新人症例発表会 2025/1/26(Web)
- 2 4 村司憲三朗、上坂建太、徳元翔子、中上和洋、中根英策、猪子森明 入院早期の訪問リハビリテーション検討が 退院後の円滑な連携につながった 心不全患者の一例 第 10 回人本心臓リハビリテーション学会近畿支部地方会 2025/2/9(京都)
- 2 5 富謙伸、本田憲胤、水本洋 NICU 入室児における四肢骨格筋とオトガイ舌骨筋の関連について 第 64 回近畿理学療法学会学術大会 2025/2/23(奈良)
- 2 6 辻本実奈美、浦慎太朗、本田憲胤 急性期病院入院中に歩行能力の改善を示した重症ギラン・バレー症候群の一症例 第 64 回近畿理学療法学会学術大会 2025/2/23(奈良)
- 2 7 本田憲胤 コロナ禍の 3 年間ににおけるスタッフが抱えるストレスの変化 第 64 回近畿理学療法学会学術大会 2025/2/23(奈良)
- 2 8 三木陵平、浦慎太朗、本田憲胤 バランス機能低下に対し、Berg Balance Scale Keyform を用いた介入の難易度調整が ADL 向上に繋がった一例 第 64 回近畿理学療法学会学術大会 2025/2/23(奈良)

## 【論文】

(原著論文)

- 1 Tsurumoto K, Kamisaka K#, Nakane E, Inoko M, Uemura K\*. Association of Frailty Assessed by the Kihon Checklist Upon the Readmission of Older Patients With Heart Failure. Circulation journal, 89(4):457-462, 2025. (査読有り)